

## 青少年の社会性に関する研究

松 井 洋\*

### Studies about Sociality of Japanese Youth

Hiroshi MATSUI

#### 要 旨

日本の青少年の「社会性」、具体的には「非行許容性」、「価値観」、「道徳意識」、「共感」、「罪悪感」、「思いやり意識」、「恥意識」等について著者と共同研究者が行ってきた40年間の研究を基に検討した。研究方法は観察学習などの実験法もあるが、主体は中高生を対象とした国際比較調査であった。

主要な結果は、道徳意識や思いやり意識については発達段階理論が知られているが、われわれの研究はこのような普遍主義を支持するものではなかった。これらの意識は状況依存적であり、観察学習等によって変容し得るものであり、文化によって異なるものであった。

その他の「非行許容性」、「価値観」、「恥意識」などの社会性もまた、文化によって異なるものであった。

日本の若者の特徴は、犯罪には許容的でないが性に関わるような軽い虞犯のような行為には抵抗が弱く許容的であった。道徳判断や愛他的判断については義務や責任などのいわば理性的理由ではなく、共感のような情緒的な理由であった。これは発達段階理論からは段階が低いということになるが、文化的な違いと言うべきものであると考える。恥意識は日本の若者は大人の眼を意識するような「他人恥」や、自己の規範に基づく「自分恥」は弱く、友だちを意識する「仲間恥」が強かった。他方、親の世代は「他人恥」が強く、年代間のギャップと言い得ることがみられた。

キーワード：青少年、社会性、道徳判断、愛他性、恥意識

青少年、つまり、子どもから若者にかけての時期には、いろいろな社会的・情緒的問題が存在する。それはまず遺伝的に規定された成長・成熟の過程で大きな変化のある時期だという原因によるものであり、時代や文化を超えた共通性を持つ。他方、青少年の問題は、その社会や

---

\*児童教育学科 教授 社会心理学

文化の問題であり、多様性がある。例えば、フロイトはエディプスコンプレックスを子どもの普遍的問題と考えるが、マリノフスキー、B. のパプアニューギニアのトロブリアンド諸島の父性の古典的研究をはじめとして、エディプス・コンプレックスという問題はフロイトの生きた社会や時代の問題に過ぎないとする研究も多い。このように考えると「日本の」「現代の」青少年問題は、今日の我が国の社会や文化の反映ということになる。たとえば、第二次大戦後は貧困という社会的状況が少年非行を誘発し、その後、所謂団塊世代は世代の人口が多く、また、急激に進む都市化や経済成長のもとで反抗、暴力や暴走行為などが問題となり、昭和の終わりころになると「しらけ世代」や「新人類」による遊び型非行と呼ばれる時代で、非行の検挙人員、人口当たりの人数、成人犯罪との比率など戦後最悪であった。ところが、平成になると非行のピークは過ぎ、現代の日本の青少年の問題は非行のような反社会性よりひきこもりのような非社会的行動・態度に重心を移している。

このような状況で、青少年の問題の背景要因として検討すべき心理学的要因は多様である。まず挙げられるのは反社会性につながる直接的要因である「非行許容性」、つまり非行についてどの程度悪いと思っているのかということである。他方、このような非行の直接的要因の背後には生き方にかかわるいろいろな態度がある。そして、そのような態度の特徴や、その学習、そして背景にある文化的要因を解明することが重要と考えた。それらの態度は、「価値観」、「道徳意識」、「共感」、「罪悪感」、「思いやり意識」、「恥意識」があげられ、これらは社会性という概念でくくることが可能であろう。そして、現代のような時代において社会性と言い得る態度を研究することは、青少年、そして他世代を含めた人の理解において根源的な課題であると考えた。さらに、このような社会性についてはその学習や発達や背景要因について検討する必要がある。そしてまた、学習を構成する文化について比較検討する必要があると考えた。本稿では私と共同研究者がこの40年間に行ってきた研究を中心にこのような問題について検討する。研究方法は観察学習などの実験法もあるが、主体は中高生を対象とした国際比較調査であった。

## 1. 道徳判断

Piaget (1932) は子どもの道徳判断、つまり良し悪しの判断の発達について、結果論的道徳判断から動機論的道徳判断に発達していくとしている。このような方向性を持つ発達段階理論は時代や文化を超えた人類共通の法則なのであるかどうか疑問を持って研究を行った。

われわれの研究（能見・松井 1977；能見・松井・中里・杉山・瀬尾 1978）では、幼稚園児

と小学校1-2年児に対してお話「花子はお父さんがいないときに植木に水をやろうとして植木鉢をたくさん壊してしまいました」、「太郎は家の中でボール遊びをしてはいけないといわれていたのに留守の時にそっとして、ボールがあたって花瓶が倒れましたが濡れただけで済みました」という類の「おはなし」を3課題スライド映写の絵画とナレーションで示した。お話について「悪いかどうか」聞いたところ、図1のように Piaget 理論と同様にたしかに年長ほど動機論が多くなっていた。しかし、幼稚園児でもかなりの子どもがすでに動機論的判断をしている。つまり発達加速と言いうることがあると思われる。この結果から、Piagetの理論が誤りとは言えないが、子どもの道徳判断の発達を観察学習をはじめとする学習によって成り立つものであり、その学習に影響する社会的な状況やメディアが効果を持っており、そのような文化的環境いかんで子どもの道徳判断は異なる発達をする可能性が示されたと考えられるだろう。

同様に、Kohlbergの道徳判断 (Rest, J., Turiel, E. & Kohlberg, L. (1969) コールバーグ, L (1987)) も Piaget の認知発達理論からの展開と言え、判断の発達の方向性を示唆する。そこで能見・米沢・中里・杉山・松井・佐藤・武藤 (1980) は小学生5,6年生を対象に Kohlberg の物語を子ども向けにしたお話を聞かせて判断を求めた。判断は Kohlberg の言うステージ3「良い子志向」とステージ4「権威と社会秩序の維持指向」の選択であった。結果は3つの課題合計で76.9%がステージ4の反応であった。Kohlbergの方法によって行われた山岸 (1976) では小学校5年生ではステージ3が7割以上でステージ4は2割に満たない。われわれの結果

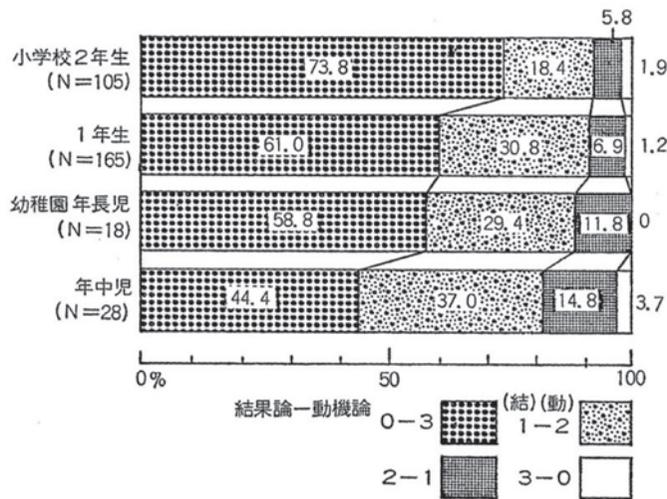


図1 ピアジェの道徳判断 日本の幼稚園児・小学生の3課題中の結果論—動機論の割合 (能見・松井 1977; 能見・松井・中里・杉山・瀬尾 1978)

は Kohlberg や山岸の結果と比べて、日本の幼児児童の道德判断がより「高次」のものとなっている。その原因の一つは、山岸の研究は Kohlberg の課題を用いたのに対して、われわれの研究は子ども向けの課題に置き換えたということである。このことから Kohlberg の言う発達段階はかなり状況依存的であると言える。そして、Kohlberg、山岸が言うような文化を超えた良い-悪いの認識の変化という発達の方向があるという説明が困難な側面があると言える。

われわれの研究結果は、道德判断の発達は Piaget や Kohlberg のいう発達段階から予想される変化を支持するものではなく、道德判断は Piaget や Kohlberg が考える判断基準や論理より状況に依存するものではないかと考えられる。このことから、子どもの道德判断の形成は後述の学習や、その背後にある文化に依存したものであり、文化により Piaget や Kohlberg の考えとは違う判断基準や様式が形成され得ると考える。

## 2. 非行許容性の文化比較

1980年代は非行が最も多く（検挙件数、人口比とも）重大な社会問題であった。そのことは一般の青少年の問題を考える上でも重要である。それは、一部の非行少年の問題は、母集団である多くの青少年の非行や犯罪に対する態度だけでなく、その背後にある価値観などの社会性の問題でもあるからである。そして、前述のように非行許容性には文化差があり、そのことが各国の非行実態の違いをもたらしめている、と同時に各国の青少年の特徴も示している。たとえば、わが国で言えば非行の第二の波とよばれる高度経済成長のころの非行は急激な豊かさのはじまりとあこがれ、管理的な社会への反抗という青少年一般の「気分」が背景となっていると考えられる。そこで、比較文化的研究を行うことでわが国の青少年の特徴を明らかにするアプローチが必要と考えて1990年代以降いろいろな文化の青少年の非行許容性について調査を行ってきた（中里・加藤・杉山・松井（1990）；松井（1990）；中里・松井（1997）；（1999）；（2003）；島田・中里・加藤・杉山・松井・瀬尾（1992）；島田・松井・中里・加藤（1994））。これらの研究では各種の非行、傷害・窃盗・万引き・覚せい剤などの犯罪行為と、学校をさぼる・飲酒・喫煙・性関係・ポルノなどの虞犯行為について、それが「たいしたことではない」と思うかどうかを中心に質問紙調査を行っている。このような実際に非行をするかどうかに関わらず、非行に対して「たいしたことはない」と考えて抵抗が弱い態度を非行許容性と呼ぶ。対象は中高生で、日本をはじめ、韓国、中国、アメリカ、トルコ、ポーランド、キプロス（ギリシャ）を含み、特に日・ト・米は繰り返し調査をしている。結果は、非行許容性には文化による違いがある。たとえば、どの文化でも中高生は犯罪行為には厳しい態度で「たいしたこと

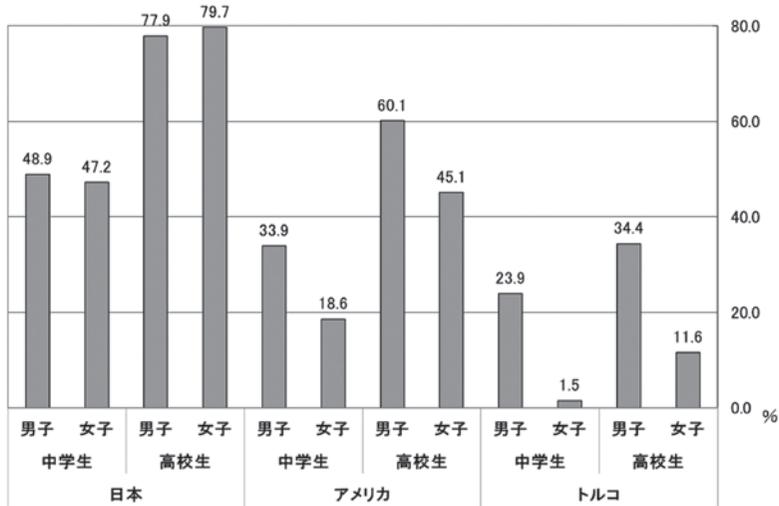


図2 異性の友達と二人で泊まる（「たいしたことない」の割合（松井 2003）

ではない」という回答は少なく虞犯行為のほうが許容的である。しかし、トルコの中高生は犯罪行為や虞犯行為のどちらにも厳しい態度だが、アメリカの中高生は犯罪行為に対しても比較的許容的な態度である。日本の中高生は犯罪行為に対しては厳しく「たいしたことない」という答えは少ないが、飲酒、喫煙、学校をさぼる、性、ポルノのような虞犯行為の範疇に入るような行為に対しては非常に許容的である。たとえば「異性の友達と一緒に泊まる」という質問をしている。この質問は中高生に性的な関係についての許容度を問うているのであるが、図2の2003年の調査の結果のように日本の中高生の許容度が非常に明確である。特に女子で、トルコでもアメリカでも女子は性関係に男子より消極的だが日本はそうではない。特に中学生女子の性に対する態度はアメリカやトルコとは異なる。同様のことは「ポルノ」に対する態度でも全く同じである。ところで、このような態度は親の調査でも明らかで、日本の父親、母親ともに子どもと同じように「性関係」「ポルノ」対して許容的である。このように非行許容性はまさに文化の問題と言えよう。

### 3. 価値観の国際比較

いろいろな価値観に関して日本、中国、韓国、アメリカ、トルコ、キプロス（ギリシャ）、ポーランドの中高生 6055 名を対象に 1993 年から 1997 年にかけて調査を行った（中里・加藤・杉

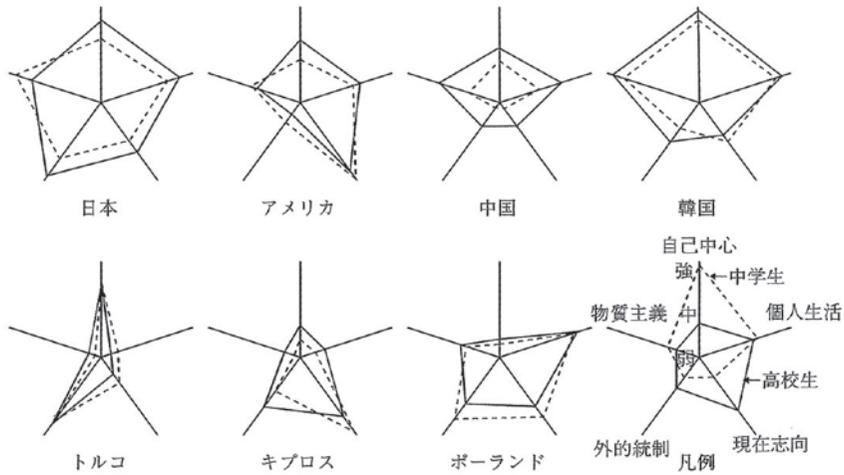


図3 7か国の中学・高校生の価値観の特徴（松井1999）

山・松井・瀬尾（1992）；中里・松井（1997）；松井（1999）。

これらの結果を簡単にまとめると、図3のようになる。アメリカの中高生は他の国とくらべると、将来より現在志向、つまり「今が楽しければよい」という態度と、「成功は努力次第」という内的統制が強い。中国はアメリカと同様の内的統制が強いがアメリカとは違い「将来のために努力する」という将来志向が強い。韓国は「人になんと思われようと自分のなっとくできる人生が大切だ」+「-人生は自分のことではなく人のことを考えることが大切だ」という自己中心と「何よりも自分の生活を充実させることが大切」という個人生活志向、「人生にはお金が何より大切だ」という物質志向が強い。トルコは物質主義、個人生活志向、現在志向は弱い、やや自己中心と外的統制の傾向がある。キプロスは現在志向と外的統制が強い。ポーランドは他者志向が強い。日本は物質主義、外的統制が強く、個人生活志向、自己中心が強い。日本の中高生の傾向は享楽的で努力や積極性に欠けるということになる。これは前述の虞犯的な非行につながる傾向と考えられる。

#### 4. 愛他性の国際比較

愛他性（利他性、思いやりという語も同義で使われる）に関して、松井（1991）は1. 大学生の愛他性は高校生と比べて僅かに高い。2. 愛他行動をする理由のうち、理性的理由は大学生でむしろ減少し、情緒的理由が増加している。これは、Eisenberg（1986）の説、この年齢

では共感から内在化された価値観や義務感へ移行するという考えを支持しない。3. 愛他性の形成要因として親の行動，学校教育があげられる。4. 情緒的理由による愛他行動は親子関係と，理性的理由による愛他行動は学校教育と関係が深いことがわかった。

愛他性の文化比較について，島田・松井・中里・加藤（1995）は，青少年の非行的態度についての国際比較調査から，因子分析を行なうと愛他性は，分与，援助，緊急援助，寄付・奉仕などの愛他行動の種類で構造化されるが，中国のみは異なり，相手がだれかということで構造化される。愛他性の因子ごとに国による特徴があり，中国の基準から見直すと各国の愛他性の強さは違ってくなどがわかった。

松井（1997）は，日本，米国，中国，韓国，トルコの青少年を対象に調査を行い，トルコや米国のように他人に対しても知人に近いほど愛他的な国と，中国，韓国，そして日本のように知人には愛他的だが，他人には愛他的でない国があり，文化によって異なることがわかった。

松井（1998）では日本，中国，韓国，アメリカ，トルコ，キプロス，ポーランドの中学生・高校生を対象として調査した。アメリカは緊急援助（倒れた人を助ける）と奉仕（子どもの水泳練習のボランティア）は平均以上で，中国は寄付（困っている友達にお金を寄付），分与（登山で残り少ない水を分ける），奉仕は平均以上だが，他人に対する緊急援助や援助は平均以下である。韓国は全体に愛他性が弱く，知人に対する援助は平均以上だが特に他人に対する緊急援助が弱い。トルコはどの種類の愛他行動も高く，特に緊急援助，援助，奉仕が強い。キプロスは全体的に愛他性が高く援助や寄付は特に強い。ポーランドは緊急援助，援助，分与は強く寄付と奉仕は弱い。日本の中高生はほかの国より愛他性が弱く，知人に対する援助は平均以上だが，特に奉仕が弱い。また，愛他行動をする理由を理性的義務（「よいこと」）と情緒（「かわいそう」「苦しんでいる」）に分けた。キプロスは理性的理由の割合が最も高く，次いで中国，韓国，アメリカ，トルコも理性的理由の割合が高い。日本とポーランドは情緒的理由が高い。Kohlberg の道徳的推論を発展させた Eisenberg の愛他性の推論の6段階によると，中高生では共感志向から内面化された価値へと移行していくということになり，日本の愛他行動の理由は発達レベルが低いということになる。しかし，同様に情緒的理由が強いポーランドは愛他行動のレベルも高い。また，高校生より大学生でむしろ情緒的理由が増えるという結果もあり，これは発達段階が低い・遅いということではなく文化の違いと言うべきであろう。

松井・中里・石井（1998）は日本，中国，韓国，アメリカ，トルコの中学生・高校生を対象に愛他性についての調査を行い，愛他行動をするかどうかの判断は，各国とも何をするのかということで構造化されるが，中国のみは相手が誰かということで構造化される。日本の中学・高校生は愛他性が弱く，さらに，愛他行動をするかどうかを「かわいそうだから」というよう

な情緒的な理由です。

以上のように愛他性、つまり思いやりの気持ちには文化差があった、それは援助や奉仕などの行動の違いの面と、相手が知っている人か知らない人かという対象の違い、愛他行動の動機の違いであった。日本の中高生は知らない人に対する奉仕などが弱いということと、動機が言わば情緒的という特徴があった。これは Kohlber や Eisenberg の普遍主義でいえば相対的に低いレベルということになるが、そうではなく、文化的特徴と言うべきものであろう。ヒトという種には生得的に愛他性があるということを否定するわけではないが、その出現の仕方には文化差があるということである。

## 5. 道徳性・愛他性の観察学習

Piaget や Kohlberg の言う道徳判断の発達を観察学習によって可逆的であるという研究が Bandura & MacDonald (1963) によっておこなわれている。われわれの立場も前項のように道徳判断の発達段階という普遍主義に疑問を持っている。そこで、道徳判断や愛他性のような社会性についての観察学習の研究を繰り返し行った。

能見・松井 (1977)；能見・松井・中里・杉山・瀬尾 (1978) では観察学習における強化の役割について幼稚園児と小学校低学年を対象に Piaget の道徳判断と愛他性の観察学習の実験を行っている。結果は Bandura & MacDonald (1963) と同様に、道徳判断は観察学習によって変容するというものであった。また、観察に自己強化の手続きを加える事は観察学習の効果を増大させるということが分かった。

能見・米沢・中里・杉山・松井・佐藤・武藤 (1980) では Kohlberg の道徳判断が観察学習によって変容すること、共感性の高い小学生は観察学習の効果が強いことが分かった。

松井・能見・米澤・青木・竹内・佐藤・杉山 (1984) では愛他行動をカテゴリーに分類し、カテゴリー別の観察学習効果、観察学習課題のカテゴリーと観察学習するカテゴリーとの関係、示範内容における自己犠牲の程度等の観察学習条件を比較検討した。

松井 (1985) では大学生を対象に愛他行動についての「共感モデル」は愛他行動の対象に対する共感を動機づけ要因として重視し「観察学習モデル」では愛他行動を示範する他者の存在を重視する。また、「統合モデル」など、異なる機能を持つモデル・観察学習の可能性を示した。

松井・能見・米澤・青木・竹内・佐藤・杉山 (1985) では愛他行動の観察学習において、「愛他行動モデル」と、「非愛他行動モデル」とを組み合わせて提示する観察学習実験を実施した。結果は、愛他・非愛他モデル両者の組み合わせ効果が認められた。

松井（1986）では、従来の行動モデル（向社会的行動を行うモデルを観察させる）以外にも、困窮モデルの示範（困っていて援助を求めているモデルのみ観察させる）も有効であることを実験により示した。

能見・米沢・中里・杉山・松井・佐藤（1987）では小学生を被験者として、愛他行動の観察学習の実験を行った。実験Ⅰでは愛他行動の観察学習の効果は、観察した行動と同じ種類の愛他行動に最も著しい学習効果が見られるが、他の種類の行動にも学習効果は般化することがわかった。実験Ⅱでは、愛他行動を行う場面を繰り返し観察させるより、愛他行動を行わない場面を組み合わせて観察させる方が観察学習効果が高いということがわかった。

能見・米沢・杉山・松井・佐藤（1988）では、小学校1年生の愛他性は4年生よりむしろ高い事が分かった。愛他行動の観察学習を行う場合の観察媒体について、視覚的媒体、聴覚的媒体の比較をし、聴覚のみの観察学習は視覚的媒体を加えた場合より効果が低い、非愛他的モデルを加えた観察は共感や印象が強いことが分かった。

能見・米沢・杉山・松井・佐藤（1989）では、小学4年生を被験者とし、愛他行動の象徴的観察学習を行い、被験者の観察する「視点」を操作する教示が行われた。視点操作は、「モデルの立場に立つ」、「モデルの行動に注意する」、「モデルの情緒に注意する」という3種の視点で行われた。結果は、同じ題材の観察学習でも、情緒的視点で観察した場合に最も観察学習効果が高かった。

竹内・能見・杉山・松井・佐藤（1990）では愛他行動の観察学習で共感視点群、認知視点群、行動視点群、無視点群、非観察群を設けて、観察学習効果を比較した。結果は行動視点群、認知視点群は各種指標から、優れた観察学習効果を示すことが認められた。

杉山・松井・佐藤・能見・竹内（1992）では愛他行動の観察学習を視点操作を行うことで実験した。視点操作の実験条件は、困窮視点、結果予期、愛他行動、の各視点と統制条件である。結果は、愛他行動視点、結果予期視点による観察学習の有効性などが示された。

以上のように、道徳判断や愛他性は学習によって変容しうる。それは、道徳判断について Piaget や Kohlberg のいう発達段階の方向性、また、Eisenberg の言う愛他行動の発達段階の方向性とは異なる方向への変容がなし得るというものであった。つまり、道徳判断や愛他性の判断の変化・発達にある一定の方向性があったとしても、それは人の発達の既定の方向性ではなく、ある社会・文化によって規定される方向であって、社会変動や異文化において変化するものと考えらるに至った。

これらの社会的学習においては、学習すべき行動を示範した場合だけではなく、すべきでない行動を示範しても学習効果があることや、モデルの操作や、同一モデルにおける観察者の視

点操作によって愛他行動を示範したり，困窮者を示範したり，情緒に視点を当てたり，結果を予期させることも学習効果につながった。社会的学習とは Bandura の古典的研究で攻撃行動の観察が観察者の攻撃性を増すという単純なものではなく，観察者の情緒を喚起したり望ましい行動をとらなかった時の結果を予期させるような多様な効果を持つものである。

## 6. 親子関係

松井・岩田（1992；1993）および岩田・松井（1993）は1歳半から2歳までの幼児とその母親が二人で絵本を読んでいる場面を記録し，チェックリスト法と，印象評定法によって，母子の気分，表情，言語，行動について分析した。結果は，集団場面の子どもの対人行動や情緒は，母親の対人行動や情緒と，気分，表情，言語，行動，応答性など多くの点で共通することを確認した

島田・中里・加藤・杉山・松井・瀬尾（1992）は日本と中国の中学生と高校生の調査を行い，どちらの国でも，非行と関係するような態度と親子関係は関連が深い，中国では親の子どもに対する態度が，日本では，親子の関係が特に関連が深いことなどがわかった。

島田・松井・中里・加藤・瀬尾・Burton（1995）は国際比較調査を行い，軽度の非行は本人特性と，重度の非行は共感と親子関係と，愛他性は共感性と，それぞれ関係が深いことなどがわかった。

松井（2001）は，日本の中学生では親子関係の認識が親子で異なり，親が思っているほどは子どもは親子関係や親の行動を評価していない。

松井（2002）は日本の中学生には親子関係が遠いという問題があり，男の子-父という同性の親子の結びつきが見られる。そして親子関係と非行的態度は関係がある。

松井（2003）は，日本，アメリカ，トルコの中高校生 2459 人を対象に調査を行い，親子の心理的距離が「近い」ことが，望ましい考え方，生き方，非行に対する態度，道徳意識，愛他性，将来志向，努力志向，他者志向，金銭志向でないと関係があり，文化を超えて一貫している。父親との近さは，軽い非行，母親との近さは他者志向，金銭志向でないと父母で異なる。

中村・松井・堀内・石井（2006）では沖縄県で調査し，日本全体と共通する傾向と，父親との遠さが必ずしも非行的態度につながらないという傾向も見られた。

中村・中里・松井・堀内・永房（2006）は，非行的態度と親子関係について検討するために，日本とトルコの中学生，高校生とその親を対象に調査を行い，子どもから見た・親から見た，両方の親子関係の近さが健全な非行に対する態度を造る。しかし，日本の親子関係はトルコよ

り遠いということがわかった。このことが非行的態度の学習において悪影響を及ぼしているということが考えられる。

## 7. 飲酒

Matsui (1989)；松井 (1990)；島田・中里・松井・瀬尾 (1990) は青年の飲酒問題について調査を行った。日本の青年の飲酒率が高いこと、初めての飲酒経験が早いこと、飲酒について肯定的な青年が多いこと、また、問題飲酒者は飲酒経験が早く、両親の飲酒のしつけが甘く、社交と飲酒とに関係が深いことがわかった。

## 8. 社会的迷惑行為

松井 (2004) は社会的迷惑行為について、調査 I では日本、アメリカ、トルコの中高生を、調査 II では日本の中学生と大学生を、調査 III では日本の中高生を対象に調査をおこなった。社会的迷惑行為は大学生より中学生にそのような行いをすることが多く、そのような行為を恥ずかしく思う気持ちが弱い。社会的迷惑行為に対する態度は非行許容性、道徳意識、恥意識とは独立した態度だが、日本では恥意識と、アメリカでは道徳意識と関係が深い。

松井・六角・中村・堀内・中里 (2008) は社会的迷惑行為の規定因は、道徳判断や価値観より恥意識が重要であることを示した。社会的迷惑行為についてはその種類によって「他人恥」より「自分恥」が規定因として重要である場合があった。また、社会的迷惑行為の種類によって規定因が異なるのではないかということが示唆された。

## 9. 恥意識

Benedict (1946). は日本人の道徳意識を罪ではなく恥である、恥の文化であるとした。これを基に、松井・中里・中村・片山・堀内 (2005)；堀内・中里・松井・中村・永房・鈴木 (2005) は中高生 1026 人を対象に調査して、恥の意識は自律的恥意識と他律的恥意識の因子に分かれ、他者を意識した恥の意識が虞犯行為や犯罪行為に対する非行的態度と関係が大きいということがわかった。

松井・中村・堀内・石井 (2007) では、日本とトルコの中学生、高校生、大学生、親、計 3820 人を対象に、恥意識について調査を行った。恥の意識の因子分析から恥意識は、公の場

面で不適切な行為を行ったときのような状況の他者同調的恥意識（中里・松井（2007）；松井ほか（2009）では他人恥）、みんなと違うこと等の他者同調的恥意識（仲間恥）、自律的恥意識（自分恥）の3因子となった。日本の親は、自律的恥意識と他律的恥意識が強く、子どもは他者同調的恥意識が強い。日本の中高生はまた、女子は他律的恥意識と他者同調的恥意識が男子より強い。

松井（2007）は国際比較を行ない、アメリカの中高生は自分恥が強く、トルコの中高生は他人恥が強く Benedict の言う伝統的な日本のようである。日本の中高生は他人の眼はあまり気にせず、仲間恥が強い。このようなことは、日本の若年層で問題行動を抑止する恥意識が弱いことを示している。また、図4のように、親の世代は他人恥というような場面で恥意識が強いが大学生以下の子の世代では弱いように、わが国における恥意識の質が世代間において変容した可能性を示していると考えられる。

松井・中村・堀内・石井（2009）は中・高・大学生2006人を対象に調査して、恥意識が自

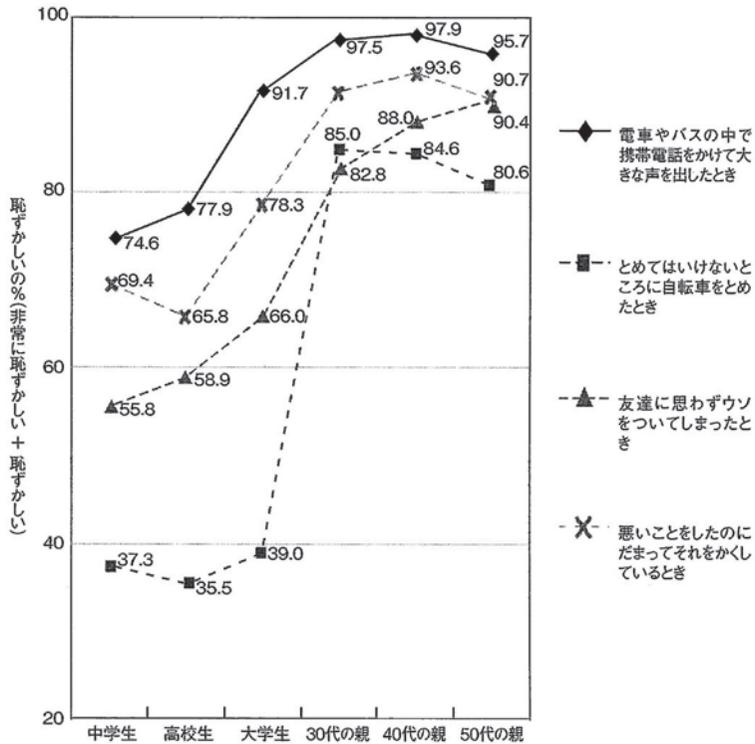


図4 日本の年代別恥意識（松井（2007）より）

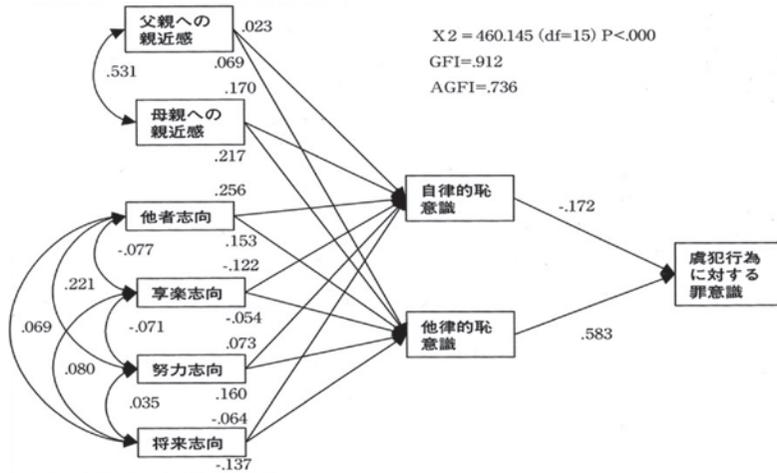


図5 虞犯行為に対する罪意識 (松井ほか (2005) より)

分恥, 他人恥, 仲間恥の3因子であることを確認し, 自分恥は大学男女が高く高校男が低い, 他人恥は大高女で高く, 男, 特に高男が低い, 仲間恥は女が高く男は低い。不良行為と犯罪行為を従属変数とする重回帰分析ではどちらも他人恥の影響が大きい (図5)。

松井・中村・堀内・中里・近藤 (2009) では日本とトルコの中・高・大学生 436 名の調査を行い, 自分恥と他人恥についてはトルコのほうが高く, 仲間恥は日本とトルコの違いは明瞭ではないが日本の女子は高い。

われわれの研究成果は, 日本の少なくとも若い世代は Benedict の言うような他人の眼を気にして生きる道徳律は弱い, 友だちのような仲間の眼は気にするという文化的特徴が明らかになった。親や大人は気にしないというところにわが国の問題があると思われ, また, 仲間を気にしすぎるということはいじめなどの問題の基底になっていると思われる。

## 10. 大学生の適応

松井 (1992) は, 大学生の大学に対する態度, 適応と, 授業における態度について調査研究を行い, 大学に対する満足感は授業の方法と友人関係が主な規定因であり, 授業の理解度は授業レベルと本人の学力, 大学に対する態度は進学動機, 入学時の態度, 個人特性, 授業方法が主な規定因であることがわかった。

松井・中村・田中 (2010); 松井・田中・中村 (2011) は, 大学満足因子を従属変数とした

重回帰分析で、友人関係と入学目的の説明力が高いことを示した。

松井・田中・中村（2012）では、大学適応の説明変数「入学目的」「授業理解」「友人関係」の3変数を高低で2分して3要因の組み合わせで8群をつくったところ、3要因すべてが高だと適応が良く、低だと悪く、1要因が悪くとも2要因が良い組み合わせだと大学適応は良好であることがわかった。

松井（2013）は、世界観のうち「努力が報われる社会だ」というような社会の認識が大学適応、幸福感、将来展望、対人適応などを説明するというを示した。

松井（2014）は世界観や人生観について評定させ、今日の日本の社会にあてはまるという傾向が強いのは「将来に希望や夢を持てる社会」、「物質的に豊かな社会」、「自由でのびのびとした社会」、「いろいろなチャンスがある社会」であり、あてはまらないという評定が多いのは「努力した人が報われる社会」、「弱いものでも生きていきやすい社会」、「お互いに助け合う社会」である。将来に希望があり、豊かで、自由でチャンスはあるが、努力は報われず弱者には生きにくく、助け合いもしない社会という認識の傾向である。つまり、大学生は自分の生きる世界が、可能性はあるが温かくはない社会と認識している。世界観・人間観・自己観について、その社会では、その人々はそのことをどの程度の確率で行うのか0%から100%の尺度を提示して考える確率にマークさせた。結果は今20歳の対象者が30年後ホームレスだと思う悲観的な確率は高くはないが、社会の安全や、普通に努力、仕事していれば幸せになれるという安心感が高くはない。つまり世界観はまじめにやっていたら幸せになれるというほど楽観的なものではない。

松井（2015）は、大学生のさまざまな問題は個々ばらばらな事象ではなく、4つの基本的な傾向もしくは認知や態度によって説明できるということを示した。一つ目は否定的自己観で、自己への自信、好意、価値が低いということで、これは幸福感の主要な原因であり、他にも大学適応、性の受容、結婚と関係が深い。否定的自己観の背景には自己に対する諦めや、社会に対する諦めがあると言える。二つ目は否定的将来像であって、自己の目標、達成、努力の欠如である。これは大学満足や適応の主要な原因となっており、否定的自己像はこれまで努力が報われたという実感が無く、努力は無駄で人生は切り開けないという認識を造り、それが、努力しない、目標や夢を持たない生き方を造っているようである。三つ目は引きこもり傾向であり、幸福感、結婚しない、学校に行かないということと関係がある。また、対人関係の問題が「引きこもり志向」につながっている。四つ目はフリーター志向であり、引きこもりとは異なり対人不適応を原因としていない。

松井（2016）は大学生の仕事観について、仕事の意識に影響する次元は、対人的態度、内発

的動機、将来展望ということが基本要因として考えられ、対人的態度が接近傾向だと「安定志向」回避的だと「自立志向」という仕事に対する態度になり、対人接近に自己主張的な積極性が加わると「営業職志向」になり、「自立志向」的態度に人嫌いと経済的自立意識の低さ、そして創造と自己主張が加わると「研究職志向」となる。内発的動機が強いと「やりがい志向」、弱いと「仕事嫌い」、内発的動機を基調とするがそれが内にこもると「メーカー志向」となり、内発的動機の弱さにネガティブな将来展望と人嫌いが加わると「フリーター志向」となる。

松井・佐藤（2017）は、幸福度を100点満点でマークさせたところ、今現在の幸福度は68.8でかなり高く、他の時代より高かったが、中学時代は低い傾向にある。学校生活、学校教育は現在の満足度とは関係があるが、未来の幸福の予期とは関係がなかった。人生生活満足度尺度（SWLS）は現在の幸福度評価と関係があるが未来の幸福度の予期とは関係がない。つまり、過去や現在の自分の状況や意識の評価から生じる幸福感は将来の幸福感を予測しない。他方、自己肯定感などの自己観や「夢」「成長」「自分らしく」という前向きな価値観は将来の幸福感と関連がある。幸福であるという感情は現在の自分についての充足感や満足感ではなく、明日や将来に対する希望である。

松井・佐藤（2018）は、学習者の視点から学習法＝教授法はグループか一人か、受動的か主体的か、逆転か否か、教えることより思考を促すかということで構造化できる。「グループ学習」の説明因子は学習意欲など積極性と向社会性であり、「受動学習」は抑制的な態度とともに教養主義や自省の態度であり、「主体的学習」は、自省の態度と教養主義に加えて積極性で、「授業のやり方に満足」という学生は主体的学習を受けたいという傾向があり、「反転学習」は、積極的ではあるが自己主張的ではなく他人とうまくやろうとし、将来については前向きで明るい態度で、「思考を促す学習」は状況に適した行動という社会性と自省の態度であり、「はっきりとした目的があって入学」という学生は思考を促す学習を受けたい傾向がある。

## 11. まとめ

青少年の社会性、すなわち道徳判断、非行許容性、価値観、愛他性、社会的迷惑行為、恥意識、飲酒、大学適応について私たちの40年の研究を基に検討してきた。これらの膨大な成果について一言で総括することが難しいが、あえて言えば「多様性」である。それはPiagetやKohlberg、あるいはEisenbergの言う発達段階普遍論のように、文化を超えた認識の段階と方向性があるという考えとは相反するものである。このように、われわれの青少年の社会性に関する研究は、彼らの特徴や問題が文化に特有であると示してきた。日本の青少年に当てはめ

ると、犯罪行為には厳しいが虞犯のような行為には許容的である。道徳判断や愛他的判断は Piaget や Kohlberg, あるいは Eisenberg の言う発達段階とは一致せず、判断基準は情緒的であり、そして、学習によって可変的である。Benedict の言う「恥の文化」はむしろトルコの青少年にはあてはまるが、日本の青少年は大人には恥を感じず仲間の「眼」を気にする。以上のように、日本の青少年の特徴は、もちろんアメリカやトルコと共通性があるとしても、独自である。そしてこれは文化の問題である、と同時に時代に依存する問題でもある。実際、1980年代の研究では「非行」が問題であったが、2000年代になると青少年の問題は非社会的なものになっていく。それでも、そこには通底する文化があってそれは道徳判断や愛他的判断で見られる「情緒的」判断であり、青少年の場合「仲間恥」というように対象は限定されるが対人的規範意識と言い得るものであり、それが時代によって形を変えるが現れるものと考えられる。

このような情緒的な判断の背景について考察すると、文化心理学者のニスベット, E. (2004) は、アメリカの母親は乳幼児に対して対象物の名前を言うことが日本の2倍多く、日本の母親は礼儀などの社会的約束を教える回数が2倍多かった。「アメリカの子どもは世界が名詞から成り立っていることを学び、日本の子どもは世界が関係に満ちていることを学ぶのである」(同171頁)。

東(1994)は日米のしつけの研究で、言うことをきかせるための方法としてアメリカの母親は親の「権威」によって強制しようとするのに対して日本の母親は「気持」に訴えるとしている。また、行為の善悪の評価は法によって公正を求める「裁判所モデル」と、共感的に支えようとする「家族共生モデル」に分かれ、どちらになりやすいかは文化に関わると説明する。

わが国の青少年の「思いやり」の動機が情緒的であるという文化的特徴に影響を与えたのはこのような「しつけ」であり、相互依存的な社会であると言えるだろう。

文化の影響ということについては、世代の「断絶」という問題もあり、これは、他者を気にするという傾向が大人では「他者一般」に対して見られるのに対して、青少年では「仲間」に対してのみ見られることである。文化によって人は作られるが、文化は人によって作られる。世代によって文化が変容することで、次世代には少し違う日本人になっていくだろうということである。

引用・参考文献

- 東洋 (1994) 日本人のしつけと教育—発達の日米比較にもとづいて 東京大学出版会.
- Bandura & MacDonald (1963) Influence of social reinforcement and the behavior of models in shaping children's moral judgment. *The Journal of Abnormal and Social Psychology*, 67(3), 274-281.
- Benedict, R. 1946 *The Chrysanthemum and the Sword: Patterns of Japanese Culture*, Houghton Mifflin, 長谷川松治訳『菊と刀——日本文化の型 (上・下)』／現代教養文庫, 1950
- Eisenberg, N. (1986) *Altruistic Emotion, Cognition, and Behavior*, Lawrence Erlbaum Associations.
- 堀内勝夫・中里至正・松井 洋・中村 真・永房典之, 鈴木公啓 (2005). 恥意識の構造 日本パーソナリティ心理学会第14回大会発表論文集 97-98.
- 堀内勝夫・松井 洋・中村 真・中里至正 (2008) 恥意識と非行的態度に関する研究 (1) 恥意識の構造. 日本社会心理学会第49回大会発表論文集, 354-355.
- 岩田 泉・松井 洋 (1993) 絵本課題場面に見る母子関係 —子どもの行動・情緒に影響する母親の特性について—児童研究, 第72巻, pp. 36-43. 日本児童学会.
- コールバーグ, L. (1987) 永野重史 (訳) 道徳性の形成 認知発達のアプローチ 新曜社.
- 松井 洋・能見義博・米澤俊治・青木敬一・竹内美香・佐藤千津子・杉山憲司 (1985) 愛他行動カテゴリーと観察学習の効果 (その2), 日本心理学会第49回大会発表論文集, 573.
- 松井 洋 (1986) 向社会的行動の観察学習過程—困窮モデルと行動モデルの観察学習効果の検討— 青山学院大学 “論集”, 27, 277-285.
- 松井 洋・能見義博・米澤俊治・青木敬一・竹内美香・佐藤千津子・杉山憲司 (1985) 愛他行動カテゴリーと観察学習の効果 日本心理学会第48回大会発表論文集, 369.
- 松井 洋 (1986) 愛他行動の生起過程の分析—共感, 観察学習との関連を中心として—, *AVEC Annual Report No. 1*, 東京外国語大学視聴覚センター.
- 松井 洋・能見義博・米澤俊治・佐藤千津子・杉山憲司 (1986) 愛他行動カテゴリーと観察学習の効果 (その3), 日本心理学会第50回大会発表論文集, 354.
- Matsui, H. (1989) Recent Psychological Studies on the Drinking Behavior of Japanese Students. *Proceedings The 9<sup>th</sup> Asian-pacific Cultural Scholars Convention*.
- 松井 洋 (1991) 青年期における愛他行動の発達とその規定因, 川村学園女子大学研究紀要 第2巻 181-193.
- 松井 洋 (1992) 大学生の学校適応と授業態度に関する研究 川村学園女子大学研究紀要 第3巻 第1号 147-165.
- 松井 洋・岩田 泉 (1992) 子どもの情緒を育てる母親の特長と役割 —母親の感情表現が子どもの対人行動に及ぼす情緒的影響について—子どもと保育研究資料集, 第1号, pp11-18 財団法人児童手当協会.
- 松井 洋・岩田 泉 (1993) 幼児の集団場面における行動・情緒と母子場面における母の行動・情緒との関係 児童研究, 第72巻, pp. 44-50 日本児童学会.
- 松井 洋・中里至正・加藤義明・瀬尾直久・石井隆之 (1995) 愛他性の構造に関する国際比較研究 日本心理学会第59回大会発表論文集, 173.
- 松井 洋 (1997) 愛他性に関する国際比較研究—米国, 中国, 韓国, トルコ, 日本の中学生・高校生を対象として—川村学園女子大学研究紀要, 第8巻 第1号, 107-119.

松 井 洋

- 松井 洋・中里至正・石井隆之（1998）愛他性の構造に関する国際比較研究, 社会心理学研究, 第13巻, 2号, 133-142.
- 松井 洋（1998）中学・高校生の思いやり意識—日本・中国・韓国・アメリカ・トルコの愛他性の国際比較研究—, *Health Sciences*, vol. 14, no. 2, 45-55, 日本健康科学学会.
- 松井 洋（1998）愛他性に関する国際比較研究Ⅱ—日本, 中国, 韓国, アメリカ, トルコ, キプロス, ポーランドの中学生・高校生を対象として—, 川村学園女子大学研究紀要第9巻 第1号, 175-186.
- 松井 洋・中里至正・石井隆之（1998）親子間の心理的距離と愛他性に関する国際比較, 日本教育心理学会発表論文集（40）, 197.
- 松井 洋（1999）日本の中学生・高校生の価値観に関する研究—日本, アメリカ, 中国, 韓国, トルコ, キプロス, ポーランドとの国際比較研究—, 川村学園女子大学研究紀要第10巻（1）131-153.
- 松井 洋・中里至正・石井隆之（2000）中学生の親子の心理的距離, 日本心理学会第64回大会論文集, 190.
- 松井 洋（2000）日本の若者のどこが変なのか：中学生・高校生の国際比較から, 川村学園女子大学研究紀要, 第11巻, 第1号, 101-114.
- 松井 洋（2001）日本の中学生の親子関係, 川村学園女子大学研究紀要, 第12巻, 第1号, 171-180.
- 松井 洋（2002）日本の中学生の親子関係と非行的態度, 川村学園女子大学研究紀要, 第13巻, 第1号, 105-119.
- 松井 洋（2003）親子関係と子どもの道徳性：日本, アメリカ, トルコの中高生の比較, 川村学園女子大学研究紀要, 第14巻, 第1号, 85-99.
- 松井洋・中村真・中里至正・有元典文（2004）社会的迷惑行為の抑制要因と恥意識の関係 科学研究費補助金（H12-14 基盤研究（C）（2））研究報告書 代表松井洋26頁.
- 松井 洋（2004）社会的迷惑行為に関する研究, 川村学園女子大学研究紀要, 第15巻, 第1号, 55-68.
- 松井 洋・中里至正・中村 真・堀内勝夫・永房典之（2004）恥意識の行動抑制効果に関する研究（4）—社会的迷惑行為に対する恥意識と罪悪感— 日本社会心理学会第45回大会発表論文集522.
- 松井 洋（2004）少子化とバーチャルリアリティの時代の子どもの社会性 児童心理58（2）, 16-21. 金子書房.
- 松井 洋（2004）非行的態度の抑制因に関する社会心理学的研究, 社会安全研究財団助成事業実績報告書, 代表松井洋21頁.
- 松井 洋・中里至正・片山美由紀・中村真・堀内勝夫（2005）非行的態度の抑制因に関する社会心理学的研究, 季刊社会安全（57）18-25.
- 松井 洋・中村 真・堀内勝夫・石井隆之（2005）非行的態度の抑制要因に関する研究 川村学園女子大学研究紀要, 第16巻, 第1号, 27-44.
- 松井 洋・中里至正・中村 真・堀内勝夫・永房典之・鈴木公啓（2005）恥意識と道徳意識の関係 日本パーソナリティ心理学会第14回大会発表論文集101-102.
- 松井 洋（2006）手のかからない子を望む親, 児童心理60（1）18-23.
- 松井 洋・中村 真・堀内勝夫・石井隆之（2006）「子ども」—比較文化研究からみた日本の子ども— 川村学園女子大学研究紀要第17巻 第1号 51-70.
- 松井 洋・中村 真・堀内勝夫（2007）恥意識に関する文化比較および世代間比較, 川村学園女子大学研究紀要 第18巻 第1号, 123-140.
- 松井 洋（2007）親と子の双方から見た親子関係 日本発達心理学会第8回大会発表論文集ラウンドテーブル.

## 青少年の社会性に関する研究

- 松井 洋 (2008) 現代若者の価値観 丸山久美子編 21世紀の心の処方学 第3部 17. アートアンドブ  
レーン.
- 松井 洋・六角絵里子・中村 真・堀内勝夫・中里至正 (2008) 恥意識と非行的態度に関する研究 (3)  
非行及び社会的迷惑行為と恥意識との関係 日本社会心理学会 第49回大会発表論文集 358-359.
- 松井洋・中村真・堀内勝夫・中里至正・近藤幸子 (2009) 非行の抑制因としての恥意識に関する研究 平  
成18年度~20年度科学研究費補助金(基盤研究C) 研究成果報告書(研究課題番号18530542) 代表  
松井洋.
- 松井 洋・中村 真・田中裕 (2010) 大学生の大学適応に関する研究 川村学園女子大学研究紀要第21巻  
第1号, 121-133.
- 松井 洋・田中裕・中村 真 (2011) 大学生の大学適応に関する研究 平成22年度川村学園女子大学教  
育研究奨励報告書 59頁.
- 松井 洋・田中裕・中村 真 (2012) 大学生の大学適応に関する研究Ⅲ 川村学園女子大学研究紀要 第  
23巻 第1号, 117-129.
- 松井 洋 (2013) 若者の世界観と適応. 川村学園女子大学研究紀要第24巻1号, 107-129.
- 松井 洋 (2014) 大学生の世界観・人生観・自己観と幸福感川村学園女子大学研究紀要, 第25巻1号 85-  
106.
- 松井 洋 (2015) 大学生における不適応傾向の分析 川村学園女子大学研究紀要, 第26巻 第1号 77-  
91.
- 松井 洋 佐藤哲康 (2016) 大学生の仕事観に関する研究, 川村学園女子大学研究紀要 第27巻 第2  
号 75-86.
- 松井 洋 佐藤哲康 (2017) 小学校, 中学, 高校, 大学時代, そして将来の幸福感—学校生活, 学校教育,  
人生生活満足度, 価値観との関係—川村学園女子大学研究紀要 第28巻 第2号 85-95.
- マッセン, P., アイゼンバーク=バーク, N. 菊池章夫 (訳) (1980) 思いやりの発達心理—向社会的行動の  
発達—金子書房.
- 永房典之・中里至正・松井 洋・中村 真・堀内勝夫 (2004) 恥意識の行動抑制効果に関する研究 (2)  
—非行的態度との関係—日本社会心理学会第45回大会発表論文集 524.
- 中村 真・中里至正・松井 洋・堀内勝夫・永房典之 (2004) 恥意識の行動抑制効果に関する研究 (3)  
—親に対する心理的距離が恥意識の形成に及ぼす影響— 日本社会心理学会第45回大会発表論文集  
520.
- 中村 真・中里至正・松井 洋・堀内勝夫他 (2005) 親子の心理的距離と恥意識の関係, 日本パーソナリ  
ティ心理学会 第14回大会発表論文集 99-100.
- 中村真・松井洋・堀内勝夫・石井隆之他 (2006) 親子関係と青少年の非行的態度: 沖縄県の中高生に対す  
る実態調査から, 川村学園女子大学研究紀要 第17巻 第1号, 101-109.
- 中村 真・松井 洋・堀内勝夫・石井隆之 (2007) 親子関係と青少年の非行的態度 II, 川村学園女子大学  
研究紀要 第18巻 第1号, 123-140.
- 中村 真・松井 洋・堀内勝夫・中里至正 (2008) 恥意識と非行的態度に関する研究 (2) —親子関係と  
恥意識の形成 日本社会心理学会第49回大会発表論文集 356-357.
- 中村真・松井洋・堀内勝夫他 (2009) 非行的態度の抑制因に関する研究 (2), 川村学園女子大学研究紀要  
第20巻 第1号, 77-89.
- 中村真・松井洋・堀内勝夫他 (2010) 親子関係と青少年の非行的態度 (4) 親子関係, 恥意識, 非行的態  
度の関連性, 川村学園女子大学研究紀要 第21巻 第1号, 167-177.

- 中村 真・松井 洋・田中 裕 (2011) 大学生の大学適応に関する研究 II —入学目的, 授業理解, 友人関係でみた対象者のタイプと大学不適応との関連—川村学園女子大学研究紀要 第22巻 第1号, 85-94.
- Nakasato Y. & Matsui H., (1992) Altruistic Attitudes of Japanese Youths., *International Journal of Psychology*, Vol. 27, p562.
- 中里至正・松井 洋 (1990) 非行抑止要因の文化差に関する研究 —日本・韓国・米国・中国の高校生を対象として— 日工組調査研究財団委託研究報告書.
- 中里至正・加藤義明・杉山憲司・松井 洋・瀬尾直久 (1992) 非行抑止要因の文化差に関する研究・日本・韓国・米国・中国の高校生を対象として, 117頁 (財)日工組調査研究財団.
- Nakasato, Y. & Matstui, H., 1993 Altruistic Attitudes of Japanese Youths. *International Journal of Psychology*, vol. 27, pp562.
- Nakasato, Y. & Matstui, H., 1996 A Structure of Altruistic Attitudes-A Comparison of American, Chinese, Korean, Turkish and Japanese Youths-. *International Journal of Psychology*, vol. 28, pp48.
- 中里至正・松井 洋 (編著) (1997) 異質な日本の若者たち, プレーン出版.
- 中里至正・松井 洋 (1999) 日本の若者の弱点, 毎日新聞社.
- 中里至正・松井洋・小林裕 (1999) 異質な日本の若者たち —非行的態度との関連で, 犯罪心理学研究 37 (特別号) 216-219.
- 中里至正・松井洋他 (2003) 非行抑制要因に関する社会心理学的研究, 平成15-16年度科学研究費補助金 基盤研究 (c) (2) 研究成果報告書 研究課題番号 1384003 代表中里至正 100頁.
- 中里至正・松井 洋 (2003) 日本の親の弱点, 毎日新聞社.
- 中里至正・松井 洋 (2007) 「心のプレーキ」としての恥意識—問題ある日本の若者たち (共編著) プレーン出版.
- ニスベット, E. (2004) 木を見る西洋人 森を見る東洋人—思考の違いはいかにして生まれるか ダイアモンド社.
- Piaget, J. P. (1932) Le Jugement moral chez l'enfant, Alca. 大友茂 (訳) (1954) 臨床児童心理学 III 児童道徳判断の発達 東京同文書院.
- Rest, J., Turiel, E. & Kohlberg, L. (1969) Level of moral development as a determinant of preference and comprehension of moral judgments made by others. *Journal of personality*. 37, 225-252.
- 島田一男・松井洋他 (1994) 青少年の非行的態度に関する国際比較研究 平成5年度私学振興財団学術研究報告書 代表島田一男 46頁.
- 島田一男・松井洋他 (1995) 青少年の非行的態度に関する国際比較研究 平成6年度私学振興財団学術研究報告書 代表島田一男 20頁.
- 杉山憲司・松井 洋・佐藤千津子・能見義博・竹内美香愛 (1992) 愛他行動の観察学習に及ぼす自己効力と結果予期の効果心理学研究, 第63巻, 第5号, pp. 295-302. 日本心理学会.
- 山岸明子 (1976) 道徳判断の発達 教育心理学研究, 24, 29-38.
- 能見義博・松井 洋・中里至正・杉山憲司・瀬尾直久 (1978) 観察学習に関連する諸強化の機能—道徳性の形成を中心として—青山学院大学文学部紀要, 第20号, 67-81.
- 能見義博・米澤俊治・中里至正・杉山憲司・松井 洋 (1980) 観察学習の効果に及ぼす個体的諸条件の研究 青山学院大学文学部紀要 第22号, pp. 199-212.
- 能見義博・米澤俊治・杉山憲司・松井 洋・青木敬一・竹内美香・河西真知子・佐藤千津子 (1985) 観察学習におよぼす個体的諸条件と外的諸条件の関係に関する研究, 昭和60年度文部省科学研究費一般

## 青少年の社会性に関する研究

研究成果報告書 211 頁.

能見義博・米澤俊治・松井 洋・杉山憲司（1987）愛他行動の観察学習を規定する示範事象と観察者特性  
心理学研究, 第 58 卷, 第 4 号, PP. 218-225 日本心理学会.

能見義博・米澤俊治・杉山憲司・松井 洋・佐藤千津子（1988）愛他行動の観察学習における観察媒体と  
学習者の年齢の効果 青山学院大学文学部紀要 第 29 号, PP. 57-68.

能見義博・米澤俊治・杉山憲司・松井 洋・佐藤千津子（1989）愛他行動の観察学習に及ぼす視点と観察  
者特性の効果 心理学研究, 第 60 卷, 2 号, PP. 98-104. 日本心理学会.